

## 地形を扱うデザイン教育のためのランドプランニング演習とその課題

(株) オオバ 正会員 ○萩野 一彦

### 1. はじめに

東日本大震災は、わが国の近代化の歴史以降 50 年に一度の大きな転換時期を迎えながらもスタートに躊躇していたところに、あまりにも爆発的な火をつけた。これまでの土木分野の価値観やシステムから脱却しながらもスピードをもって景観・デザインに取り組む必要がある。しかしながら、これまでの価値観を変えるということの意味は、まったく新しい技術を開発するという事ではない。景観・デザインの技術としては、むしろ、直前の時代には軽視されていたが以前からある普遍的な価値観に戻った技術の再生を求めるべきである。

震災復興においては、「復興まちづくりにおける景観・都市空間形成の基本的考え方」<sup>1)</sup> や「歴史・文化資産を活かした復興まちづくりに関する基本的考え方」<sup>2)</sup> が策定され、各被災自治体の復興まちづくりにおける景観・デザインのガイドラインとして活用されることを想定している。しかし、残念ながら被災地では各事業の事業論理によって進められ、景観・デザインのガイドラインが活用されているとは言い難い。つまり、市街地整備や防災集団移転によって住宅地をつくるスピードに景観・デザインの検討フェーズは用意されないのである。また、景観・デザインの素養のある技術者はそもそも希少な存在であり、現場の事業に当たることはなく、一般の多くの技術者にはガイドラインを斟酌するすべがない状況である。

震災復興に限らず、今後のわが国のまちづくり全般において、これまで軽視されていた総合的な計画デザイン技術が求められ、フィジカルプランニングとデザインの人材育成は大きな課題である。本稿では、これまで筆者が関わった、地形を扱う総合的な計画デザイン技術といえるランドプランニング又は敷地計画演習の報告を行うとともに、若干の課題を述べることとする。

### 2. ランドプランニングとは

丘陵地における住宅地や複合的新都市等の都市開発においては、土地造成、緑地保全、建築、交通、排水等を総合的に計画する敷地計画が必要とされ、その中で造成計画は、重要な空間デザイン要素となっている。さらに近年において敷地計画は、社会的・経済的課題や環境課題の増大を背景として、ランドプランニングへと発展してきている。しかしながら、わが国の丘陵地開発においては、このランドプランニングに当たる計画デザインの技法もプロセスも明確ではなく、希少でありかつあまり表に出ない潜在する技術となってきた。

丘陵地の地形を扱うことばかりでなく、低平地の市街地であっても河川や道路であっても、地形を理解することは景観・デザインのプロセスそのものである。また、重要なことは、その理解の延長にコンターによって地形をデザインする能力が必要になるということである。

なお、コンターによる 3 次元のデザインは非常に複雑な技術であり、造成デザインと配置計画を同時に行う必要があることから、一般には解りづらく平面計画に偏りがちになる。今後、普及・継承していくためには、専門特化した教育訓練システムが必要になるものと考えられる。

### 3. ランドプランニング演習事例の報告

#### (1) 登録ランドスケープアーキテクト (RLA) 資格認定試験の受験対策セミナー

2004 年度から実施されている登録ランドスケープアーキテクト (RLA) 資格認定試験における実技部門の出題内容をみると、セクション 2 No.1 土地利用ダイヤグラム, No.2 敷地計画, セクション 4 No.3 造成・排水設計においてランドプランニング技法に深く関わる内容となっている。ここから、造園分野においては、プランニング教育や職能形成の方向性として、地形を扱うデザインを重視していることがわかる。

また、このための受験対策セミナーが行われ、技術レベルの維持向上を図っている。

キーワード：ランドプランニング, 敷地計画, RLA, デザイン演習, オタク化

連絡先：〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4 丁目 4-12 (株)オオバ まちづくり本部 TEL03-3460-0120

## (2) 早稲田大学芸術学校都市デザイン科 ランドスケープ計画設計演習

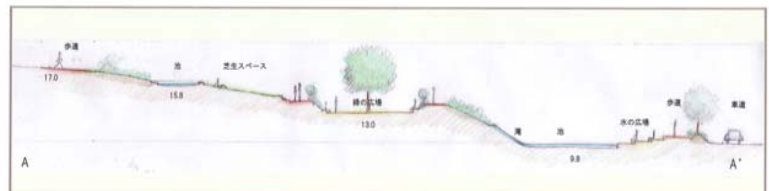
ハーバード大学大学院デザインスクールで P. ウォーカーが行ったスタジオ演習を参考に構成された演習であり、1998年度から2005年度まで行われた。

3年コースの夜間専門学校であり、基礎知識や経験のバラつきがあったが、建築、都市デザイン演習も並行して行われていたこともあり、20～30人/年の中で、毎年2～3人の学生に特に素養を感じられた。

## (3) (株) オオバ ランドプランニング技術習得会

入社1年目・2年目の有志の社員を対象に、2006年度と2007年度に行われた社内技術研修会である。述べ参加人数は29人である。内容は、早稲田大学芸術学校の課題とほぼ同様の構成である。第1課題では、自然地形ではない現況地形を自由に変更することができる条件で、コンターによる造形を行う課題である。第2課題は、現況地形を造成し、道路を通し平場を設ける課題である。第3課題は、約40ha程度の丘陵地における戸建住宅地を含む複合開発のフィジカルプラン作成の課題である。

第1課題では、受講者全員が課題提出できたが、第2課題では約半数、第3課題では2年間を通じて完成し提出されたのは1名のみであった。丘陵地における戸建住宅地開発の計画デザインが、いかに複雑で難しい技法を必要としているかがうかがえる。



### ■ 第1課題

## 4. おわりに

### (1) 素養を見出し育てる仕組み

専門教育を受けた中の5%の素養のある人材をいかに見出し、社会で育てる仕組みをつくる必要がある。

### (2) オタク化の懸念

筆者の個人的な感想であるが、知識があり評論もできる優秀な学生は増えているが、デザイン素養とは結びつかない傾向、いわゆるオタク化がみられ、プロの技術者・デザイナーが育ちにくい環境になっている。

### 参考文献

- 1) 国土交通省都市局：復興まちづくりにおける景観・都市空間形成の基本的考え方，2012.4
- 2) 国土交通省都市局：歴史・文化資産を活かした復興まちづくりに関する基本的考え方，2012.4
- 3) 萩野一彦：丘陵地開発における造園的保全の技法としてのランドプランニング，千葉大学学位論文，2011.3